窓からのぞいた土地の姿

建築家　田熊隆樹（たくま　りゅうき）

Essay　時の調べ

2015年、アジア・中東を8カ月かけて一人で旅した。旅の中で見てきた有名無名の建築、とりわけ民家の窓に注目して書いた旅行記を、『アジア「窓」紀行』という本にまとめた。

窓は空気や光、においや風景が出入りする装置であるが、その材料や使い方、装飾にはその土地の文化や風土が色濃く反映されている。窓を観察することで、その土地の姿が見えてくる。

例えば中国山西省の黄土高原では、今でもヤオトンと呼ばれる地下住居に人が住んでいる。地下6㍍くらいの深さに掘った中庭から四方に掘られた横穴は、冬を暖かく、夏を涼しく過ごすための知恵だ（写真1）。入り口は中庭に面した1つの窓（穴）で、ここだけ丁寧に黒い煉瓦（れんが）で補強されている。光も空気もにおいもテレビも、この窓から中に入ってくる。内部の湿気のために、壁に新聞紙を貼る習慣があるのも面白い。家を「建てる」という概念すら疑問に思えてくるこの環境では、いかに穴掘りの労力を削減するかという工夫から、2つの穴の入り口が共有され、奇妙な形が生まれている。長い長い村の歴史の中で定着した形だ。

村を案内してくれるのは大体老人たちだった。ほとんど唯一覚えた中国語で「我可以看你的房子嗎？（あなたの家を見せてもらえますか？）」と話しかけてみると、多くの人が家に上げてくれた。僕はそのたびにメジャーを引っ張り出して家を実測し、図面を描き、写真を撮らせてもらった。彼らは皆優しく、フルーツやお茶でもてなしてくれた。

インド北部のチベット文化圏、標高4200㍍のKibber（キバー）という村では、初老の夫婦の家に泊まった。少し走るだけで息が上がってしまう高地で、村全体が静寂に包まれている。石を積み、土を突き固めて作った白い家の窓は、牛のツノを模した黒い縁の装飾で悪いものの侵入を防いでいる（写真2）。屋上で干した草をそのまま窓から詰め込み、家を貫く穴を通じて直接、地層階の家畜に届ける工夫は、間取りを描いてみて初めて気付いたことだ。人々の宗教や生活、生産に結び付いた形を、窓はひっそりと教えてくれた。

写真1　中国山西省のヤオトン住居

あるいは中国四川省西側の高山地帯にある「ラルンガル・ゴンパ」というチベット仏教の僧院。1980年ごろ、ある一人の僧侶によって作られ始めた宗教都市だ。丸太や石を使い手作業で建てられた僧侶の家は赤く塗られ、すり鉢状の地形を埋め尽くすように並ぶ（写真3）。見たことのない風景だった。窓を見ると、手作業の壁とは対照的に、アルミサッシがギラギラと輝いている。標高4000㍍の孤高の宗教都市も、今では大量生産品なしには成立しないのである。窓は手作業で作るのが難しいのだろう。どの家も同じような規格品の窓を持っていることが、この場所の新しさを物語っているともいえる。

それと対照的なのは、2000年ほどの歴史を持つというイラン北西部のマースーレ村だ。山の斜面に沿って密集し、石や煉瓦の組積造（そせきぞう）でできた黄土色の民家の壁面には、様々な色や形の木製窓がはめ込まれている（写真4）。八角形の色ガラス窓、曲線を帯びた装飾の窓、家から出ない女性が外を見るために考え出されたイスラム特有の窓。ここには、様々な時代に作られた窓が共存しているようにみえる。家が建て替えられる際に古い家から引き継がれたり、壊れてしまって新しく作り直したものもあるかもしれない。壁や屋根などの構造体とは独立している窓だからこそ、そういう時間軸の混在が起こるのだろう。村が古いということが、時に窓の多様さに現れるのだ。

写真2　インド北部の窓の装飾

写真3　ラルンガル・ゴンパの密集する僧侶の家

写真4　マースーレ村の多様な窓

それぞれの土地にはそれぞれの窓があり、その窓の周りには人々の生活があった。そのどれもが個性的ではあるが、旅を進める中で、まったく離れた土地に似たような窓が作られていることにも気付いた。どうやら、人間の考えることにはある「癖」のようなものがあるらしい。この旅で僕は、窓から見たアジアは1つではないが、そんなにバラバラでもないことを知った。

略歴
1992年東京生まれ。早稲田大学大学院建築学専攻修了。大学院休学中にアジア・中東11カ国の建築・集落・民家を巡って旅する。2017年から台湾・宜蘭のFieldoffice Architectsにて美術館、公園、駐車場、バスターミナルなど大小の公共空間を設計している。2018年文化庁新進芸術家海外研修制度研修生。著書に『アジア「窓」紀行―上海からエルサレムまで―』（草思社、2022年）。